

第二十五章 盾にされた原子力発電所

追い詰められると何をするか分からないのが人間の性。それが独裁者ならなおさらだ。人類史上最悪の独裁者はヒトラーと言われているが、彼の時代にはまだ核爆弾はなかった。それが今は星の数ほどある。時代が変わった。そのヒトラーが歴史から消え去るほどの強烈な独裁者が出現した。その名はプチレンコン。

独裁者というのは通常はいい人。だから最高位に登り詰めた。しかし、何かの事情でヤケクソになると人間である事を辞めてしまう。その具体例が自分の形勢が不利のなると「核兵器」をちらつかせる。それだけならまだいい。ウクライナー共和国のサボリーナにある世界最大の原子力発電所を占領した。原発を盾にミサイル攻撃を激化させる。当然ウクライナー軍は反撃できない。

ソシアから天然ガスの供給を止められた西側諸国は原発の再稼働を停止した。また、カーボンニュートラルを目指してソシアや中華民国の技術指導のもと原発建設を計画していた新興国も、原子力の平和利用のはずの原発が戦争の盾に使われたという現実に躊躇する。少数のテロリストが企てたテロではない。大国が武力で原発を占領した。

ソシア軍の行動が産油国や原発建設技術を輸出する国々に多大な影響を与えた。つまり各国

は再生エネルギー技術の開発をこれまで以上に加速させる。さらに必要なエネルギー量を厳密に計算するようになる。少しでも我慢すればかなりのエネルギーが節約することが分かってくると、エネルギー事情の悪い国々はイデオロギーや宗教の違いを超えて結束することになった。

*

「ウクライナのサボリーナ原発からロシア軍はミサイルを首都キーフに打ち込んでいるわ」
イリが歯ざしりする。

「大丈夫。ハリー・マウスの針光線が迎撃している。命中率百パーセントだ」

榊はまるで自分の手柄のように報告する。ロシア軍がミサイルを補給しようにも補給路をイ
エロー・タイガーが遮断する。しかし、ロシア軍もしたたかだ。

ブラックシー艦隊が全滅しても今なおクリム半島はロシアにとって重要拠点だ。制海権を失ったためこのクリム半島に物資はもちろんのこと石油や天然ガスの供給が困難になった。そこで占拠した原発の電力をクリム半島のブラックシー艦隊基地やその周辺に送電する作戦を立てる。しかし、不思議なことに原発のすべての電力ではなく半分を自分たちに、残りには手をつけなかった。

プチレンコン大統領はこれをロシアの温情だと喧伝した。しかしウクライナ共和国はもちろんロシアに刃向かえない国を除くすべての国々は反発する。死体に向かって「銃で撃つたのは右半分。左半分は無事だ」と言っているようなものだ。

国連も国際原子力委員会もプレンコン大統領にサボリーナ原発からの撤退を要求するが、「クリーム半島はソシア領土だ」と言って譲らない。

*

サボリーナ原発を占拠したソシア陸軍部隊がミサイル攻撃を始めたときの戦車ハリー・マウスの活躍を宇宙戦艦の大型浮遊透過スクリーンでイリたちが見ている。

トゲトゲしい砲塔が輝き始める。ハリネズミが丸まったような砲頭部から無数に近い光が放たれる。まぶしくて太陽のように見える。ほんの一瞬とはいえこの光を見ると、仮に目を閉じていたとしても失明するほど強烈な輝きだ。

発射直後のミサイルのスピードは決して速くはない。針のような光線がミサイルを次々と破壊する。ついにミサイル攻撃が止まる。視力を失ったソシア兵は武器を捨て両手を上げる。それまで手を出せなかったウクライナー兵がすかさず捕虜にしていく。原発の職員が歓声を上げたときにはハリー・マウスの姿はなかった。

以上はソシア軍が原発を占拠して半日もたたないうちの出来事だった。その数時間後にはウクライナー軍がソシア軍が残したミサイルでクリーム半島のソシア軍の拠点を攻撃する態勢に入る。

何とかクリーム半島を取り戻して穀物の輸出を再開しなければ開発途上国の国民が餓死する。ソシアは原発どころか天然ガスや石油などのエネルギー、そして穀物まで支配しようとし

ていた。穀物供給はまだまだタイトだが明るいニュースだった。

*

とりあえず何とか原発に不測事態が発生することなく切り抜けることができた。しかし、原発がいかに無防備で危険な施設かと言うことが証明された。原発を盾に、あるいは背にしてミサイルや大砲で攻撃を受けても反撃できない。さらに送電を止められたらどうしようもない。

かつて原発は原子力の平和利用と疑う事なく喧伝されたが、その敷地は一瞬にして攻撃基地や武器貯蔵庫になる。反撃すれば周り一帯が被爆する。これは火遊びという生やさしいものではない。核保有国や原発所有国はこういう自体が起こりうる可能性を十分理解していたはずだが、長い間その目は閉じられままだった。つまり核兵器を使わなくても原発を攻撃すれば同じ効果があることが明白になった。

核ミサイルを敵国に撃ち込む必要はない。敵国に原発さえあれば通常ミサイルで事足りる。そして首尾良く占拠できれば敵国内に拠点を構築できる。

今や軍備最強国の定義が変更になる。最強国とは国内に原発を持たず超音速長距離弾道ミサイルを持つ国と認識される。逆に原発を持つている国は敗者となる。カーボンニュートラルなどと言って原発を擁護する意見があるが、原発は明らかにアキレス腱だ。もちろん多数の原発が破壊されれば放射能は国境など関係なしに拡散するから勝者も滅びる。核兵器を持つ持たないということなど意味がない。